

染谷：るよ」とか、ちょっとした声をかけてあげるだけでも、お母さんはすごくうれしい気持ちになりますし、地域の人たちに見守られているなっていう安心した気持ちになると思うんですね。つまり地域の子育てを地域のみんなで応援していくんだっていう気運をもりあげていく、そういうことが一番大事なのではないかと感じています。地域の気運です。

鈴木： おっしゃるとおりですよ。地域で見守るボランティアや交通安全のボランティア、そういう誰からも頼まれていないんだけど、自主的に動いていただいている方が子どもたちに声をかける。これが非常に重要だと思うし、そういうところから地域づくりはできてくると思いますよね。

先程、神谷さんからもあったように、行政主導で協働ということを立ち上げてるけれども、なかなかニーズに合っていないのがありますよね。しかし、情報収集とかは行政のほうがやりやすいと思う。だから情報を行政が集約をする。行政はニーズに合わせ、NPOさんであったり、地域の人たちの代表であったり、そういう人たちと交流しながらいろいろなものを積み上げていく。そこで企画を立ち上げる。こういう企画を県が主催でやるわけではなくて、地域の人たちでもしやったらすれば、ものすごいことになる気がするわけですね。ですから、そういうところで行政が手助けをするというか、一緒にやっていく。それこそができればいいかなって今感じましたね。

漁田： 素朴な質問が私一杯沸いてきちゃったんですけど、それぞれお聞きしていいですか？例えば、シニア世代である私やその知り合いたちが、じゃあちょっとなんか助けたいよって思うときには、どこにいけないのでしょうか…。
光司： 僕もNHKラジオで子育て人生相談やってます。これも悩みがありまして…。

漁田： じゃあ、悩み相談のところへいけないのか、どこへ連絡すればいいんですかね。どこにいても、つながっていくようにしていただきたいんです。例えば私が島田市の子育て支援課に電話すれば、支援課の方が私をどこかのボランティア団体につないでくださいますか？どこにいてもその人が活躍する場につながっていくようにしていかなきゃいけない。どこかに相談してつながらなければ、そこで切れてしまうようじゃまずいんじゃないかなって思いますが、みなさんいかがですか？

鈴木： 今日初めてみなさんお会いしたんですね。ですけど、さきほど楽屋で話をしたのは、もうここでつながったよねって話をしたんです。私は磐田市ですけど、浜松での悩みも磐田市に連絡してくれば結構です。私、鈴木壮一郎に連絡いただければ、どんなことだろうって話を聞いて、それだったら浜松のどこどこへ問い合わせしてみようとか、ワンクッション入れて僕の方でボランティアの組織に聞いてみて、かけ直してあげるよみたいな話ができれば、それは行政の地域のエリアを越えたサービスにつながる。湖西の話が来れば、神谷さんを紹介できるかもしれないですよ。それがつながりなのかなって気がしますよね。

神谷： 今日みなさん初めてお会いするのが、とても不安だったんですよ。それで私、みなさんとの共通点を探したんですよ。鈴木(光)さんだったら、鈴木さんが浜松北高っていうのをインターネットで調べておいたので、「私、隣の高校の出身です」ってご挨拶させていただきました。鈴木(壮)さんだったら、磐田だから「磐田の社会福祉協議会の誰々さん知ってますか」と話のきっかけにしました。染谷さんは、先日お会いしていますので、「あのときご挨拶しました神谷です」って言って、共通点を探すんですね。なの

で、みなさんも共通する人とか、あそこのあの人に言えば何かつながるんじゃないとか、人と人とのネットワークの中で少しずつやりたいことを広げていったらいいと思いました。

染谷： 知ってるところに、ここなら声をかけられる、聞いてみられる、あるいは電話番号を知ってるからとか、何でもいいんです。自分がかかけやすいところ、いきたいところ、そこからまず取っ掛かりをもっていけば、必ずご自分が活躍できる場にたどり着けると思います。

漁田： 少なくともこの5人のどこに電話かけても、あるいはメールをしても、どこかにつながるようにご返事ができるかと思いますので、大丈夫です。もうちょっと具体的に聞きたくなったので、代わりに聞かせていただきますけど、お子さんと関わってて怪我させちゃたらどうしようというのが、やっぱり腰が引けることだと思います。保険のことはどうなるのか、どなたかお教えいただけますか？

染谷： 私の方では、ボランティアとしても活躍していただけることが決まりました、すぐ、ボランティア活動保険をかけております。活動する人たちの、行き帰りの交通事故も含めて、保険をかけています。それから子どもさんたちを支援する場では、その日の活動一つ一つに行事保険をかけております。もしちょっとした怪我があったり、親子が行き帰りに何かがあったりしたときにはその保険で補うように。保険のない行事とかボランティア活動ということはしておりません。

漁田： ありがとうございます。お金はかかるんですかそれは？

染谷： はい、島田市に住んでいる方であれば、社会福祉協議会が半分持つてくださいますので、私どもの団体は一人について1年間の掛け金を200円程度払うくらいです。それは個人の負担ではありません。スタッフに1円もお礼を払えない代わりに、団体の資金で保険はすべてまかっております。

漁田： 次に、シニア世代が登録するに当たって、腰が引けてしまうのは…。月に1回2時間くらいでもいいのかとか、わがままな日程でやらせていただいてもいいのかしらっていうあたり、そこはいかがでしょうか？

神谷： 来ていただいて支援していただくこともそうですし、お家で雑巾を縫っていただくとか、そういったお家でやっていただくこととかも十分私たちが助かります。皆さんができる活動を是非言っていただいて、それによってお願いしたいっていうものが絶対あると思います。とにかく、何でも言っていただきたいと思います。

染谷： 同じくです。都合が悪かったら他の人がやってくれます。「ああいよいよ。その日は私が出るから、そんなの私がやるから大丈夫だよ」ってみんな気持ちよく声をかけてくださいます。みなさん「都合のつくときに、都合のつく範囲で」ってことが原則だと思いますので、必ずこの日に行かなきゃということとはほとんどありません。

漁田： というわけで、ずいぶんハードルが低くなってまいりましたので、行政の方から…。

鈴木： どのNPOさんもそうなのかなと、実際はどうなのでしょう。そういう気持ちのあるメンバーが集まっている、主に運営している2、3人がそういう思いがあるから、誰でもNPOや子育てサークル、母親クラブの活動ができる。でも、そうじゃないNPOさんもあるのかなぁと思ったものですから、その辺を教えていただきたいと思います。

神谷： そうじゃないNPOはあるかもしれませんが、少なくともうちの団体は、ほんとに手の空いている方に助けていただきたいですし、一緒に参加していただきたいと思っています。

染谷： 無理があったらボランティアは長続きしないと思うんですね。やっぱり

長続きするためには、そこが居心地がよくて、やりがいがあって、認められて、人のお役に立つだけじゃなくて、やっぱり自分にも帰ってくるものがあるから長続きすると思う。そういうものがない団体は、活動そのものがやはり行き詰ってしまうのかなと思います。

神谷： 染谷さんなんかもそうなんですけども、中心となっているメンバーがお母さんのニーズとボランティアしてくださるニーズの両方をすいあげてマッチングさせなければならぬと思うんですね。で、どちらかのニーズに偏ってしまうと、それこそ長続きしない、発展していかないと思う。そこを行政がやるのか、NPOがやるのか、それがやれるかやれないかで、たくさんの方が助けてくれるかどうかが左右されると思いますね。

漁田： 今、行政という言葉が出てきましたけれども、いかがでございます？

鈴木： 自分たちの業務でいえば、先程子育て相談員派遣事業という名前を出しましたが、そのスタッフっていうのは、60代の方と40代の方とで、10人ほどで組織していて、みなさん臨時職員なんですね。今までの役所は、臨時職員とは8時半から5時までの勤務をしてくれる人でした。それで、先程言われたように働きやすい環境を整えたんです。シフトで、勤務できるときにはめる、そういうやり方をしたんですね。だから週2日の人もいれば、週3日の人もいて、みなさんが譲り合いながら自分の時間で都合をつけてサービスをする。そうすると、余裕が出て気持ちが豊かになるので、ある程度のクレームに対しても親身に対応することができるんですね。我々は常々忙しい中にいるので、時間を割いてゆっくりケアできない。だから、行政も時間的な仕組みを変えながらやっていく必要があると感じました。NPOさんでそういうふうな暖かい環境の中で人を育てていくんだということであれば、たぶん長続きはするでしょうし、そういうイズムが広がっていけば、またいいメンバーが集まってくるんですよね。だからツーカーでいろんなことが進んでいくのは、とてもすばらしいなぁと感じました。

漁田： 子育てを支援してほしい側から、登録の方法とかは？神谷さん。

神谷： お電話いただいたり、ネットでメールいただいたりすると思います。例えば、子どもたちがサツマイモをつくっていたんですけど、今までつくってくれた方が畑をやめることになってしまったんですよ。子どもたちは年に1回のサツマイモのつるを植えて、そして後は育ててもらって採るだけなんですけど、つるを植えたものが大きくなってサツマイモを採るということがすごく楽しいんですね。どうにかならないかっていうことを聞いたら、畑さえ貸してくれたらつくってやるよっていうおじいちゃんが現れたんです。じゃあ畑どうしようかなって思ったときに、行政に頼んだら空いている土地を借りることができた。もとは畑じゃない場所なんですけど、そのおじいちゃんにおこしてもらって畑にしてもらったんですね。その代わりにさっき言ったちょっとのお礼とかやりがいとかの部分なんですけど、みんながサツマイモを植えるのはこの半分だけ、後の半分はおじいちゃんが好きな野菜をつくってくださいっていったんですよ。そしたらそのおじいちゃん、自分の家の野菜をつくったんですね。でも子どもたちが、そのサツマイモをしょっちゅう見に行くわけですよ、親子連れで。そうするとその畑のおじいちゃんが、いつも畑を耕しているので、頼んでもないんですけど、その親子が見に来たときには、畑のニンジンとかタマネギとかをくださるそうなんです。なので、どっちも得している感じなんです。行政で無料で貸していただいた畑を、おじいちゃんは野菜がつくれて得しているし、子どもたちもサツマイモだけだと思ったら、おじいちゃんが野菜をくれて得した。なので、できることを言うてくださってお互いにいろんな話をしたら、今こういうのが足りないんです、ああじゃあこういうことできるよ、これがあれ

ばできるよかになる。電話なり、メールなりしていただければ、お互いのいい方法が見つかるんじゃないかなと思います。

漁田： いろんな側面があるんですね。勉強になります。ではもう少しハードルを低くしてみまして。先程からお母さんたち、特に不安なお母さんたち、褒めてもらいたいと思っているお話がいっぱいできました。で、褒め方ということなんですけれども、言葉のプロでいらっしゃる先生からみて、褒め方って…。何でこんな質問しているかっていうと、実は、一つ大変面白い例がありました。私はよくこういう場所で声をかけてあげるといいですよっていうことを言ったら、ある知り合いのシニア世代の方が、声をかけたんだけど、「あれー、立派なお子さんだね」そまではよかったんですけど、「朝青龍にそっくりじゃないか」って言っちゃったらしいですよ。言われた側が、「うちは女の子」なんですよって言って、それっきりプツンと切れてしまって、「ああ俺すごくいけないこと言ったのかなぁ、朝青龍好きなんだけどなぁ」って。そんな感じで、非常に何か一言言うのも難しい。手を見てまるで絵本みたいだねっていうことは、褒め言葉になるのか、かなり難しいかもしれないので、そのあたりのことを先生…。

光司： 僕はね、褒めるのはそんな難しくないと思うんですよ。問題は叱り方ですよ。叱り方は難しいと思う。これね、この人は叱っているじゃなくて、ただ自分の苛立ちをぶつけているじゃないかっていうのが結構あるわけですよ。本人は叱っているつもりになっているのがまずいんですね。例えば、東京とかでよくみるといううちの娘が見たって報告してくれたことがありました。山手線に乗ってた若い男が、携帯かかってきて出ちゃった。小声でこうやってしゃべってる。その前をおじいさんが立ってて、「お前たちは何でこんな場所で携帯を使ってるんだ、うるさいじゃないか、やかましい、すぐ切れー」って言ってるわけ。そしたら周りが、あんたの方がうるさいって。その人は若者に成長してもらいたいという気持ちはないんですよ。要するにね。ただ自分が見てイラッときたものをポンとぶつけちゃった、本人は叱ってるつもりなんだけれども、これは僕ね、困るなって思うんですよ。自分の経験なんだけれども、東海道線に乗ったとしますね。向かい合わせ4人席あるじゃないですか、二人二人が向かい合ってる。若い女の子が3人座っていて、一つ開いたスペースに荷物を置いてる。その横でおじいさんだかおばあさんが立ってたわけ。そこで、「網棚に荷物乗せる力がないのかね君たちには、これ乗せようね。座れるじゃんか、座ってもらおうよ」。女の子たち、「すみません」みたいな、もうこれからは絶対こういことしないわよっていう感じでした。あつ、自分のいいなかったことが伝わったなど。

褒めるのは簡単なんだけれども、叱るのは難しいと思うのは、時として感情の爆発になっちゃう。叱る前にひと呼吸おいて、ワンテンポおいてしっかりと考えて叱る。子どもたちにどのようになってもらいたいのか、次世代にどうなってもらいたいのかきちっと考えた上で、ちゃんと伝わるような言葉掛け。ただね、これをやろうと思うとなかなか難しい。叱り方が問題だと思えますね。

漁田： ありがとうございます。実はこういう、子育ての講演会なんかしていると一番質問が多いのは、褒め方じゃなくて叱り方。親御さんが、つい子どもを叱ってしまう。後で必ず反省する。その繰り返しで辛いよとおっしゃるお母さんが大変多いんですけども。今の鈴木先生の例のように、一般の別な若い方やお子さんを、地域のお子さんを叱るっていうこと、もっと難しいと思うんですよ。これをどうしていくか。

染谷： 叱るっていうことではありませんけれども、教えたいと思ってどう伝えたいのかって悩むことがあります。たとえば、サンタクロースが来てプ